



奈良国立博物館
NARA NATIONAL MUSEUM

令和3年4月、奈良国立博物館の館長に就任いたしました。

奈良国立博物館は正倉院展をはじめとする特別展や名品展の開催、また様々な博物館活動等を通じて、国立博物館が果たすべき役割を全うしていきたいと考えています。

奈良国立博物館 館長

いの うえ よう いち
井 上 洋 一 氏



令和4年7月21日、同館・館長室にてインタビュー

▶ 館長自身のこと

—— 考古学に関わるきっかけとなったのは

私は神奈川出身ですが、大学・大学院は東京でした。大学院修了後は東京国立博物館に入り、そこでずっと研究員をしておりました。一時期、九州国立博物館に赴任したことはありますが、ほとんどは東京で、奈良での勤務も初めてです。

私がこの道に入ったきっかけは、実は相当古くて中学校3年生の夏休みのことです。郷土研究部のクラブ活動で社会科の先生が地元相模原市での発掘に連れて行ってくれたのですが、その時に土器や石器が大量に出土したのです。縄文時代の中ごろ、だいたい5000年前ぐらいの竪穴式住居跡も発見されて、その中央部には炉跡もあり、そこから真っ赤に焼けた土も出てきたのです。

私は5000年前の人間がこの場所に住んでいたということがとにかく不思議で、自分がまさにタイ

ムマシンに乗って縄文時代のムラを訪れた気持ちになって、このことを研究したい、要するに考古学者になりたいって思ったのが最初でした。振り返るとあの発掘調査はありがたかったですね。あの経験がなかったら、私は今ここにはいないのですから。

—— 決定打となったのは

研究者を目指すという将来の道を決定付けたのは、昭和57年、大学院生の時、今もきな臭い匂いがいっぱい残るシリアという国に発掘調査に行った時の事です。当時のシリアは内戦が終わって民主化の道を歩もうとしていた時期でしたが、町は、まだ軍が支配していました。かつて古代文明が栄えたシリアが度重なる戦乱で衰退してしまった。その姿を見てなんともいえない気持ちになったのです。そして、アッラーのみが唯一絶対神という考え方を持っている敬虔なるイスラム教徒と問答する中で、私はいろいろな世界があるのだという

ことを学び、「文化とは何だろうか、歴史とは何だろうか」ということをもっともっと突き詰めたいと思ったのです。

—— 奈良の印象についてお聞かせください

奈良には素晴らしい文化財や自然が沢山あるのに、奈良の人たちはあまりに身近にあり過ぎてその価値を十分に認識されていない、なんかもったいないなと正直思っております。また、多くの観光資源があっても、観光客は奈良ではなく京都や大阪に宿泊します。ずいぶん前からそういうことが問題になっていると荒井知事からもお話を伺っておりまして、「少しでも私どものような文化施設も地域振興や観光のお手伝いができれば」ということで、「奈良県文化振興戦略懇話会」の委員をさせていただいております。

私は考古学を専門にしている関係で古墳や銅鐸^{どうたく}の出土を巡るなど、他の人とはちょっと違ったルートで奈良を辿っております。学生時代は少しかっこつけて「万葉集」を片手に山の辺の道を歩くとか、あるいは明日香の地もよく訪れていました。そして、興福寺から奈良国立博物館、東大寺、そして春日大社の一帯は、今でも奈良時代そのものが残っているという思いがずっとありましたが、こうした思いは赴任してから一層強くなりました。

「神仏習合」という言葉がありますよね。多くの神社の宮司様やお寺のお坊様にお会いして、いろんなお話を聞いたり、あるいは行事に参加させていただいたりすると、この地は「神仏習合」というよりも「神仏融合」といった方がぴったりする。今でもそれがこの地には生きているのだということを強く感ずるようになりました。

—— 遠方からの観光客は、修学旅行以来という人が多い

そうですね。私も出身が神奈川でしたので中学校の修学旅行はやはり奈良、京都でした。興福寺、東大寺そして法隆寺へ行った時の記念写真も残っています。その時に、やっぱり奈良の大仏はすごかったと印象に残っていますが、あとは猿沢池の近く

の宿に泊まってみんなで枕投げをした、そういう思い出しかありません。奈良の歴史風土に触れるというようなことは、残念ながらなかったですね。

—— 奈良県在住ながら大阪や京都へ通勤する者を揶揄する「奈良府民」という言葉があります

京都と奈良の距離感は認識していたのですが、奈良と大阪の距離がこんなに近いということ、私はここにくるまで知りませんでした。赴任して、皆さんが仰っている意味はこういうことなのかと実感した次第です。

ただそれよりも、これだけの狭い地域に奈良、京都そして大阪という三つの都市が、それぞれに個性豊かな風土・文化を形成していることがユニークで面白いなと思っています。しかし、残念なことに、この三都市での集まりで「奈良国立博物館の館長です」と自己紹介すると、「奈良国立博物館、名前は聞いたことあるけれども、どこにあるのですか」と言われることがあります。そして「正倉院展をやるところですか」という反応が一番多いですね。



このような状況ですので、まずは奈良県民の皆さんから奈良国立博物館の存在、どこにあり、どういうコレクションがあるのか、そして、どういう活動をしているのか、といったことを知っていただければありがたいなと思っています。

▶ 日本で2番目に古い奈良国立博物館

—— 奈良国立博物館の誕生

わが国には東京、京都、奈良、九州（福岡県太

宰府市)の4か所に国立博物館があります。奈良国立博物館は、東京国立博物館に次いで日本で2番目に古く、明治28年に開館しました。

興福寺や東大寺そして春日大社など大きな寺や神社がある奈良公園内に当館も位置していますが、博物館の前庭を野生の鹿が闊歩かっぽしているというのは、世界広しといえども奈良国立博物館しかありません。そういう意味でも自然に囲まれた良い環境にある博物館だと思います。

奈良に国立博物館が誕生した背景の一つですが、明治時代、政府の方針により寺社は一部領地を召し上げられたことなどにもより困窮していきました。さらに廃仏毀釈や近代初頭の混乱の中、これまでの歴史を顧み、文化財を守ろうという機運が高まっていきました。そして、明治7年に設立された半官半民の「奈良博覧会社」によって博覧会が開催されたことで、地元、奈良の活性化が図られるとともに、明治維新後の諸制度の刷新によって荒廃や散逸の恐れがあった多くの文化財が、広く一般の人びとに貴重な遺産として認識されるようになりました。こうした状況の中で寺社に伝わる数々の名宝や重宝を保管し公開してそれらの価値を広く世間に知らせるとともに、保存に協力することを目的に奈良国立博物館が誕生したのです。

— 所蔵品はどのくらいありますか

奈良国立博物館では、先史から近代まで約2,000件に上る多彩な作品を所蔵していますが、とりわけ仏像そして仏画、写経、仏教工芸に優れた作品が多くあり、まさに「仏教美術の殿堂」といわれるにふさわしい内容になっていると思います。さらに、こうした所蔵品に加え多くの寺社などからご寄託をいただいているものが約2,000件あります。こういう作品が奈良国立博物館の魅力をさらに増幅させているのではないかと思います。

— おすすめは「なら仏像館」

奈良国立博物館には、「なら仏像館」、「青銅器館」、「東新館」、「西新館」の4つのギャラリーがあります。この中で注目していただきたいのは、

なら仏像館です。なら仏像館は開館当初の旧帝国奈良博物館の本館でした。建物は重要文化財ですが、平成28年に改修をしました。

この建物は、東京・赤坂にある迎賓館の赤坂離宮、東京国立博物館の表慶館、京都国立博物館の明治古都館などを手掛けた明治時代の宮内省の建築家片山東熊とうくまによるもので、博物館建築としては日本最古級のものと考えられています。



なら仏像館の外観

現在は、飛鳥時代から鎌倉時代に至る日本の仏像を中心に国宝、重要文化財を含む100体近くの仏像を展示していますが、ここは国内の博物館で最も充実した仏像の展示施設といえるのではないかと思います。

— 修学旅行や遠足がようやく増えてきました

最近になって修学旅行や遠足が増えてきましたが、残念ながら、興福寺から歩いて来られて博物館の前を素通りして東大寺そして春日大社へ行かれる方が多いのが実態です。私は30分でもいいから博物館に寄ってこないかなと思うのです。

なら仏像館は平常展の料金で見られるところなのですが、実は高校生までと70歳以上の方などは無料なのです。こうした情報を修学旅行の関係者や旅行会社などにうまく伝え、奈良国立博物館の存在を知ってもらうことを含め、さらなる来館者増加のための戦略を練っていくべきだろうと思っています。

— 金剛力士像を特別公開中です

現在、なら仏像館で特別公開しているのが、山門を修理している関係でお預かりしている金峯山

寺（奈良県吉野町）の金剛力士（仁王）像です。

この仁王像は、東大寺のものに次いで日本で2番目に大きく、像高は5mで圧倒的な存在感があります。この仁王像を見た子どもたちはみんな、「うわっ」と驚いています。その驚きを成長しても心の片隅にでも持っていてくれるといいなと思います。



なら仏像館で特別公開中の重要文化財 金剛力士立像（奈良・金峯山寺）

また、こういう迫力ある像だけではなく、飛鳥仏のすごく柔和な顔をみて心が安らぐとか、そんな思いでもいいのです。これは何時代のもので、どこのお寺のものであるとかは、あとからでもわかるので、まずは見て感じてほしいと思います。

▶ 新型コロナウイルス感染症拡大の中で博物館が果たす役割

—— 新型コロナウイルス感染症の影響はいかがですか

新型コロナウイルス感染症が拡大する前の令和元年度は入場者数が68万2,395人でしたが、令和2年度は14万239人と激減しました。正倉院展を「事前予約による日時指定入場」としたことも影響しました。昨年は、正倉院展の事前予約数を一昨年より増やしたこともあって少し持ち直し、30万8,003人になりました。このような状況で少しずつ来館者は戻ってはいますが、コロナが終息しない限り入場者数はなかなか増えていかないだろうと思っています。

コロナの感染拡大で人と人との接触が奪われました。大学の新生にとっては、入学したけれど

全く学校に行くことができず、新しい良き仲間と巡り合うことも、触れ合うこともできないわけです。また新社会人もテレワークを強いられ、また、飲み会もありません。飲み会でいろいろ培われる文化っていうのもあると思うのですが、そういうものもなくなってしまいました。大切な人との最後のお別れもできないし、親しい友人のお見舞いにも行けないような状況になってしまいました。今でもその状況は少なからず続いています。

私たちはこういう経験をしたことで、隣人の存在、家族の存在、大切な人の存在というものを強く意識するようになったと思います。そのうえで、自分自身を見つめ、他者を見つめ、そして他者を認めることの大切さを多くの人がこのコロナ禍で学んだはずです。

他者を思う心というのは本当に大切です。その心を大きく豊かなものに育てていくことも博物館に課せられた大きな役割の一つじゃないのかと思っています。

—— 新型コロナウイルスの感染拡大の中でも、海外と繋がる

新型コロナウイルス感染拡大への対応の中で、人類の記憶が凝縮されている文化遺産を守り、それを後世へ伝えていくという博物館の責務を強く感じています。そういう観点から申しますと、ちょっと言い過ぎかもしれませんが、私たちのような博物館で働く者は文化の力で人の心を救う「エッセンシャルワーカー」であるという思いがあります。新型コロナウイルスの蔓延を負の遺産だけにしてはいけない。世界中の人たちがそれに打ち勝とうと様々な努力を重ねています。その頑張りを次に生かすということが必要だろうと思っています。

そのためにわれわれのような博物館は何ができるのだろうか、と考えています。博物館は、日本の文化、歴史が脈々と続いていることを海外の人たちに理解してもらうために最適な場所です。価値観の違う民族が作り上げた文化を共有すること、これが相互理解のための近道だろうと思っています。

す。そのためにもダイバーシティ（多様性）という切り口で歴史、文化を見る必要があります。

われわれはよく海外展をやりますが、海外展をやる意味が実はそこにあるわけです。文化外交の基本は相手を知ること、まずはその地域を知り、その人を知り、その社会を知るところから始まるのだと思っています。

今の日本は韓国や中国と政治的には決してうまくいっているとはいえない状況にあります。しかし私たち博物館の世界では、文化を通して両国の多くの友人と繋がっています。彼らと様々な情報を交換して、「コロナが終息したら展覧会のコラボをしよう」という話をしています。これはアジア各地の博物館だけではなく、欧米の博物館とも同じような相談をしています。



コロナ禍で海外へ渡航できない、海外から観光客を迎えられないという状況にありますが、その中でそれぞれの国の博物館が自分たちと自分たちの文化を見つめる場としての役割を果たしていると思います。そして自分たちのコレクションを磨き上げ、将来、一緒にコラボすればきっと素晴らしい展覧会ができるのではないかと考えています。

そしてこれは大切なことですが、文化でお互いの国々がつながっていることが、実は安全保障にも大きな影響を与えているということです。こういったことをもっともっと博物館として発信していかなければいけないと思うわけです。

▶ 特別展「奈良博三昧」を開催

—— 博物館、文化財への思いは

私は、もっともっと多くの方に文化財に親しんで欲しいと思っています。仏像を見て、ありがたいと思うだけでもいいのですが、さらに、仏様ってどうしてこんな形をしているのだろうかとか、どうして「如来」「菩薩」「明王」「天」の4つのグループを形成しているのだろうかということを、子どもたちにも興味を持ってもらいたいし、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんたちにも、ただ単に仏様が大切なものであるということだけではなくて、そこに込められた人々の願いや歴史、文化というものを解っていただきたいと考えています。そして、奈良国立博物館って面白いところだと少しでも思ってくれたらいいですね。また、正倉院展だけが奈良国立博物館ではないということも知ってもらいたいと思います。

—— そこで特別展を企画したのですか

「奈良博三昧 ～至高の仏教美術コレクション～」という特別展を昨年夏に開催しました。ポップなデザインのポスターやチラシを作成するとともに、営利目的でない限り、展示しているすべての作品や解説パネル、展示室内の風景などの写真撮影を可能とするなど、過去にはない奇抜さや新しいことを取り入れました。

実は当館の研究員が恐る恐るこの斬新な特別展のチラシの案を持ってきたのですが、私は、「いいね、大いにやってくれ」と承認しました。奈良国立博物館を知ってもらうためには、まず目を引いてもら



特別展「奈良博三昧」のチラシ

うことが大事です。それで、「えっ、これは何だろう」というように多くの方々に思ってもらいたかった。そして、特に若者に来てほしかったのです。

当館の来館者は圧倒的に50代以上が多く、

コアは60代と70代の方々なのです。その方々には今まで通り来ていただきたいのはやまやまですが、コロナ禍で、出控える方もいらっしゃる。また、加齢とともに足を運ぶ回数が減るかもしれません。そこで、若者に興味を持ってもらわないと奈良国立博物館は未来に繋がっていかないと、思いから、若者にターゲットを当てたわけです。

——公式キャラクター「ざんまいず」登場

奈良博三昧の開幕に合わせて奈良国立博物館の公式キャラクター「ざんまいず」を正式にデビューさせました。「ざんまいず」は、当館の所蔵品をモチーフにした5匹の動物達で、当館の研究員がデザインしました。とにかく少しでも奈良国立博物館を皆さんにとって親しみやすい存在にする、そのための努力をスタッフ全員でやっています。

公式キャラクター「ざんまいず」の紹介（画像左から）

キャラクター名	モチーフとなった所蔵品
くじゃっぴ	どうくじゃくもんけい 銅孔雀文磬（南北朝時代）
しろぞー	普賢菩薩像（平安時代）
あおじし	獅子（鎌倉時代）
はにわんこ	埴輪犬（古墳時代）
ぎゅーたろ	だいいとくみょうおうきぎゅうぞう 大威徳妙王騎牛像（平安時代）



——狙いは的中しました

奈良博三昧展には、若者を刺激するという意図がありました。若者をターゲットとする戦略は当たりまして、会場には今まで見たことがなかった若い世代が多く来てくれました。

人間は面白いと思った場所には、誰にすすめられなくても自ら行くわけです。例えば東京ディズニーランドは、楽しいから行きます。長時間並んでも誰も文句を言いませんし、リピーター率も非常に高いです。だから奈良国立博物館は面白いところだと若者たちが少しでも思ってくれる仕掛けが出来れば、また来てくれると思うのです。

▶「持続可能性」という視点

——クラウドファンディングを実施

今、全世界でSDGsが話題になっている中、奈良国立博物館だけでなく博物館全体が、持続可能性という視点を持って事業展開をしていくべきだろうと思っています。

当館の敷地内に「八窓庵^{はっそうあん}」という茶室がありますが、時間の経過とともに大きく劣化してきました。またその庭園の整備も急務でした。本来であればその整備費は館の予算あるいは国の予算から出していかなければならないのですが、財政が逼迫していて、それができない状況でした。でも一方で待ったなしで劣化は進んでくるので、苦渋の選択としてクラウドファンディングで多くの方々にお力添えをいただくということになりました。

おかげさまで非常にありがたい結果になったのですが、ただ、われわれはお金を援助してくださいということだけで、クラウドファンディングを行ったつもりはないのです。皆さんの援助によって大切な文化財が守られ、後世に伝わって行く。みんなで文化財や博物館を守るという文化を育てていく。その一つのきっかけとして、クラウドファンディングを活用したいと考えたわけです。



八窓庵の外観（左）と内部（右）
* 現在庭園と茶室の改修工事中（9月中旬完了予定）

——奈良国立博物館が目指すのは

日本政府は数年前から博物館を観光資源の一つと捉えて様々な政策を打ち出していますが、私は基本的には、これに賛成です。フランスを例にとると、ルーブル美術館の展示品を見るために世界



東西新館上空

から多くの観光客がバリエを訪れ、そして人が集まることで大きな経済効果が生まれているからです。ただ、それだけではありません。ルーブルの作品を見ることで多くの来館者の心が豊かになる。これが最も重要なことだと思うからです。

ルーブルのように、「奈良国立博物館の展示品を見るために奈良に行きたい」と多くの人にその価値を認めてもらえるような博物館をスタッフ一同で目指していきたいと考えています。

(聞き手・文責：丸尾尚史)

<正倉院展のご案内>

正倉院宝物は、かつて東大寺の倉であった正倉院に収納されていた品々で、その数はおよそ 9000 件を数えます。正倉院展は、これらの中から毎年 60 件前後が厳選され公開される展覧会で、今年で 74 回目を迎えます。

今年は、令和 4 年 10 月 29 日（土）から 11 月 14 日（月）まで開催します。開館時間は、午前 9 時～午後 6 時（金曜日、土曜日、日曜日、祝日（11 月 3 日）は午後 8 時まで）です。

昨年に引き続き、観覧には「前売日時指定券」が必要で、販売は 9 月 26 日（月）午前 10 時からです。また、当日券の発売はありません。

詳しくは、当館ホームページ等でご確認ください。

●プロフィール 井上 洋一 氏

■主な経歴

1956 年神奈川県相模原市に生まれる。1985 年東京国立博物館に考古学の研究員として任官。その後、企画部門も務め、九州国立博物館学芸部長、東京国立博物館副館長などを経て現職。

■座右の銘、好きな言葉

和を以て貴しとなす。

Dum spiro, spero（生きている限り、私は希望を抱く）

■大事にしていること

感性

■趣味

おいしくてリーズナブルなワイン探し
音楽鑑賞

■私のモットー

仕事は楽しく。真面目に遊ぶ。

■好きな食べ物

オニオングラタンスープ

■お勧めの本

茨木のり子『自分の感受性くらい』

■私のストレス発散法

おいしい食事とお酒をいただきながらの、よき仲間との語らい。

■奈良県内で好きな場所

若草山の山頂

■所属組織の概要

奈良国立博物館。1895 年開館。独立行政法人国立文化財機構の一機関。仏教美術および奈良を中心とした文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行っている。

・組織名：奈良国立博物館

・住 所：奈良県奈良市登大路町 50

・開館時間：9：30～17：00

（展覧会、曜日によっては延長あり）

※入館は閉館の 30 分前まで

※最新情報は HP をご確認ください

・電 話：050-5542-8600（ハローダイヤル）

・休館日：月曜（祝日の場合は翌日）、
12/28～1/1

・奈良国立博物館ホームページ

<https://www.narahaku.go.jp/>